

承前

東京駅は、かつての姿と比べると見る影もないほど荒れ果てていた。床は破損し、天井や壁のパネルも失われて、剥き出しの配線が垂れ下がっている。天井から滴り落ちる汚水が、ところどころに水溜まりを作っていた。

それにもかかわらず、以前の賑わいにも負けないくらい大勢の人々が行き交っている。モノトーンの雑踏を見ながら、終戦直後はこんな雰囲気だったのだろうと吉村は思った。皆一様にむつつりと押し黙り、眉間に深い皺を刻んで、重い荷物を背負って歩いている。明日への希望は誰の瞳からも失われているのに、お互いに道を譲り合い、肩がぶつかれば頭を下げ、窓口の前では整然とした列を作って待つなど、マナーは驚くくらいよかった。単に日本人の特性というだけではなく、恐怖が全員の行動を縛っているのだ。他人に迷惑を掛ける不届き者は、次の瞬間、見えないうで首をへし折られて物言わぬ骸と化すかもしれないからである。あるいは、ひよつとすると、そういう連中はすでに淘汰され、絶滅してしまったのかもしれないが。

「行ってくる」

吉村は、足下に置いてあったリュックを背負った。中に入っているのは紙屑だけなので、見かけほど重くはない。

「気をつけて」

サビーナは、心配げに吉村を見た。中央アジア系の美貌は不自然に人目を引いてしまうので、

キヤップを目深まぶさに被り、サングラスとマスクで顔を隠している。

「うん」

吉村は、ゆっくりと歩き出した。素顔のままだが髭ひげぼうぼうなので、一見したただけでは自分だと見破られることはないだろう。

ESP精銳部隊エリートのミツシヨンで囿おとりにされたときも緊張したが、アニメの登場人物になったような、どこかふわふわとした非現実感が漂っていた。今は違う。自分が何をすべきか、きちんと自覚しているし、失敗すれば死ぬことも覚悟していた。失敗続きの人生の中で、もっと早くこんな意識状態になれたら、いろんなことが違っていたかもしれない。だが、終わったことを後悔しても詮無せんないことだ。大切なのはこれからののだ。愛するサビーナと新生活を送るためには、絶対にやり遂げなくてはならない。

日本橋口にほんばしにある『東海道・山陽新幹線のりば』というサインは、破損して灯あかりが消え、『●海道・山●幹線のりば』としか読めなかったが、迷っている人間はいないようだ。それよりも、こうなってもまだ新幹線が走っていること自体が奇跡だった。

吉村は、サビーナの方を振り返った。サビーナは、ガラスがなくなって風が吹き込んでくる日本橋口の入り口の方に顎あごをしゃくった。

吉村ははつとした。数台の車がロータリーを回って、停車するところだった。いずれも黒塗りのセダンなどではなく、ごくふつうのワゴン車だったが、周囲を歩いていた人影は、蜘蛛こもの子を散らすようにいなくなってしまった。

いまだきガソリンを入手できるのは、一部の特権階級のみであり、魔王まおう王子おうじの関係者かもしれない

いからだろう。

五台のワゴン車のドアが開くと、二十人近い男たちが次々と降り立って隊列を組んだ。いずれもアメフトの選手のように体格がよく、ダークスーツを着込んでいる。見るからに、ボデイガードという顔つきと身のこなしである。

吉村は、他の歩行者に倣^{なま}って道を空^あけ壁際に避難した。まるで、江戸時代に参勤交代の行列に行き会った旅人のようだなと思った。

ボデイガードたちは、密集した塊を作^つって歩いてくる。あの中に、やつらが守^{まも}っているボスがいるのだ。新宿の魔王子、手塚不律^{てづかふりつ}が。

吉村は、上目遣^{うわめづか}いに集団を眺^{なが}めて、手塚不律の姿を探した。すると、十重^{とえはたえ}二十重^{にじゅうじゅう}に取り囲^{とりこ}まれた中に、子供らしい小さな姿があるのがわかった。

ボデイガードの一群は邪魔^{じゃま}だったが、逆に都合な面もあった。あり得ないことだが、もし新宿の魔王子が一人で歩いていたら、恐ろしくて近づくことはできなかっただろう。人の壁があるおかげで、こちらの姿を見られずにすむのだ。

さて、どうやって、やつを殺そうかと思案する。

当然ながら、魔王子一人だけを殺して、なるべく他に被害を出さないようになどという甘^{あま}っちょろいことは考えない。むしろ、ボデイガードの壁越しに攻撃して、皆殺しにする方が現実的だ。通行人に死者が出るのしかたがない。数人ならばという条件も付けない。東京駅そのものを破壊し、たまたまここにいた旅人を全員犠牲にする案も、それによって魔王子を葬^{むす}ることができるのなら、排除するつもりはなかった。

異様な密集集団は、新幹線の改札口に近づいた。駅員が、あわてた様子で飛んできて、自動改札機の下に手を差し込みフラップドアを全開にした。

迷っている暇はない。改札を通られたら、姿を見失ってしまう。

成功の確信はなくても、一か八かやるしかなかった。

吉村の目は天井と床を往復した。上下同時に破壊すれば、いくら手塚不律の反射神経が神がかったとしても、一瞬無防備な状態になるはずだ。

吉村は、集団の先頭が自動改札に達するのを待った。ここでは、横に広がったまま通り抜けることはできない。いくつかの列に分かれたとき、不律の姿を目視できるはずだ。

あと、七秒ほど。

落下する天井のイメージを作る。破片は鋭く尖らせて、ナイフのように下を歩く人間に降り注ぐ。

六秒。

今度は、崩落する床のイメージだった。一瞬で粉々になった床を突き抜けて、やつらは奈落の底へと転落する。

五秒。

爆発する自動改札機。至近距離から、金属部品が弾丸のような速度で襲いかかる。

四秒。

ほとんど同時だが、順番を決めなくてはならない。……天井、床、自動改札機の順がいいだろう。

三秒。

もう一度、頭の中で手順を反芻し、思いがけない邪魔が入らないか、周囲を見渡す。

二秒。

頭が真っ白になり、気が遠くなりかけたが、必死でバラバラになった自分自身を繋ぎ合わせる。
一秒。

ボタンを押すイメージ。

さすがに千分の一秒ですべてを起こすというわけにはいかなかったが、ほとんど同時に三つの爆発が集団を襲った。天井の破片は噴流となつて、自然落下の十倍以上の加速度で真下を包み、床は消滅して、全員を宙に浮かせた。

そして、自動改札機の金属片は、散弾のように水平に飛ぶ。

吉村もまた、手塚不律のようにスローモーションですべてを見渡していた。

急速に広がりつつある粉塵の中に、集団は包み込まれていた。いかつい男たちの間に、細い子供の脚が見えた。すべては、床にあいた大穴の上で浮遊し、一拍おいて吸い込まれるように落下していく。

自動改札機の破片は、屈強なボディガードたちの身体を易々と貫くと、骨にぶつかって方向を変え、大勢の一般客を薙ぎ倒した。

不律は？ 不律は、何をしている？

少なくとも、天井からの第一撃、床の穴の第二撃くらいは余裕でかわし、自動改札機の破片にどう対処するかが見物のはずだった。そこへ、吉村がとどめの一撃を加えるのだ。何百本もの見

えない矢が四方八方から飛来すれば、運がよければ仕留めるチャンスもあるのではと思ったのだが。

だが、小さな脚の持ち主は、粉塵に巻き込まれ、なすすべなく奈落へと落下していく。その前に、鉄片の散弾がその身体を貫くのがわかった。

おかしい。

こんなに簡単に、不律を仕留められるはずがない。

時間感覚が元に戻り、吉村はキョロキョロと周囲を見回した。

すると、サビーナが、こちらに駆けてくるのが目に入った。

「吉村さん！ 逃げて！」

大声で叫んでいる。

「罨わなよ！」

やっばり、そうだったのか。吉村は、サビーナの方へ走ろうとした。

次の瞬間、機関銃弾が雨霰あめあられと降り注ぐ。

吉村は、その場にしゃがみ込み、透明な楯たてで背中を覆おほった。

だが、反射的に身を守ったのは最悪の選択だった。吉村の目に、サビーナが倒れるのが見えた。

「サビーナ！」

吉村は、大声で叫び、サビーナに駆け寄った。瞬間、自分自身は無防備になっていたが、どうでもよかった。

サビーナは、うつ伏せになって床に横たわっていた。背中にいくつもの穴が開いており、鮮血

が噴き出していった。

「サビーナ！ しっかりしてくれ！」

吉村は、泣き叫ぶ。

「吉村さん。……ごめんなさい」

サビーナは、すでに虫の息だった。

「わたし、だまされた」

「誰に？ やっぱり、不律か？ あいつが……」

「ノナ」

そう言っつて、サビーナは息を引き取つた。

吉村は、茫然ぼうぜんとして、その場に座り込んでいた。

サビーナが、死んでしまった。

俺の唯一の生きる希望が。

初めての愛が。

妹に裏切られて。

吉村は、かすかに首を振つた。

罨くもに掛けられたことがわかつた以上、一秒でも早く逃げなくてはならない。もしここに手塚不律が来たら、もうチャンスはゼロである。

だが、吉村は、逃げる気にはなれなかつた。

もう、どうでもいい。なにもかも。

誰でもいい。俺を殺してくれ。

もう、生きていたくない。生きる価値はない。俺の生涯はクソだった。さっさと終わらせてくれ。

顔を上げると、機関銃や狙撃銃で武装した男たちが見えた。

どうしたんだ。何をやってる？ さっさと撃てよ。

吉村は、のろのろと立ち上がり、両手を広げた。

「撃て！」

誰かが号令し、再び銃弾が襲いかかる。

だが、そのすべては、吉村の周囲に張られた透明な楯に撥ね返された。跳弾が当たったのか、狙撃手のうち何人かが倒れるのが見える。

あれ？ どうしたんだ？ 吉村は訝った。

それから、この楯を張ったのは間違いなく自分自身であることに気づく。

俺はまだ、生きたいと思っっているのか。

何のために？

がくん、と意識が変容した。

とたんに、あまりにも明瞭な答えが浮かんだ。

殺すために決まってるだろう、この間抜け！

頭の中で、何かが吠え猛っている。

女を殺されて、仇も討てねえのか？ サビーナは、ノナにだまされたって言ってただろうが？

だったら、ノナを殺せ！ それから、裏で絵を描いた手塚不律もだ。

どいつも、こいつも、皆殺しにしろ！

ああ、と吉村は呻いた。この恍惚とした感覚。

あのとき、俺は完全に悪鬼と化しかけていた。それを押しとどめたのは、サビーナだったのだ。だが、もうサビーナはいない。

やつらは、彼女を殺したことを後悔することになるだろう。

今日で、東京は壊滅する。

(づづく)